

IPU X RHIT ローズハルマン工科大学学生がやってきた！

—日米学生合宿 2014—

Japan-US three-day student seminar 2014 between IPU and RHIT—

石川県立大学 新村 知子・山岸 倫子（教養教育センター）

高瀬 恵次・長野 峻介（環境科学科）

1. はじめに

今回の合宿プログラムは、2014年3月2日（日）から4日（火）の二泊三日、石川県立大学の学生18名とアメリカ、インディアナ州のローズハルマン工科大学（Rose-Hulman Institute of Technology）の学生14名が参加して実施された。これは、2年前に共同で行った日米Map Projectをふまえて、ローズハルマン工科大学から「国際交流のために再度学生を派遣したいが受けてもらえないだろうか」という呼びかけがあって実現したものである。準備期間が短く、前回のようにはオンライン上でのプロジェクトを行うことができなかったため、プログラム全体を作り直した。それにあたって、事前の長期的プログラムは組めないものの学生が自分たちのアイデアを出し合いながらチームで企画し、アメリカ人学生と共同で取り組める内容をめざし、さらに合宿中は一人ひとりが自主的に考えながら動くことができるように考えた。

今年度は、長年日米の国際交流でさまざまな経験があり実績をあげてきたローズハルマン工科大学のスコット・クラーク氏（文化人類学教授）が退職する年にあたり、彼の引率する最後の海外研修となるということであった。そのため、海外研修の企画・運営方法を学ぶという目的で、ローズハルマン工科大学からはクラーク氏を含め4名の教員が参加した。本学からはアメリカ人学生と同数程度が望ましいということで応募



者を選考し、18名の学生が参加した。本学の教員も英語教員2名を含む4名が企画・運営を担当した。

学生たちは、合宿が始まる前からFacebookで交流を始め、互いに自己紹介をした。基本的なグループ単位として、アメリカ人2名、日本人2ないし3名の観光グループを設定し、そのメンバーでキャンパスツアー（Campus Tour – Visiting Scientists at IPU）、金沢市内観光ツアーを企画・実施した。また、アメリカ人学生を対象とした日本文化ミニワークショップ（けん玉、折り紙、書道、ふくわらい）をこれとは異なるグループ構成で企画し、本学学生全員が企画の段階から参加し、当日も全員が運営にあたった。また、大学紹介プレゼンと記念Tシャツ作成及びTシャツデザインについての説明、アイスブレイキング活動も希望者で担当を決め、各グループが事前に準備ミーティングを重ねた。

前回に比べて教員や講師が全体を指導する活動を大きく減らして、学生主導で企画した活動および小グループで行動する活動にほとんど全てを変えた。その結果、日米の学生一人ひとりが最初から非常に積極的に協力しあって、さまざまなことに取り組んだ。与えられたタスクを通じて言葉の壁を越えてともに取り組み、終始コミュニケーションを取ろうとし、問題があったときには双方で協力し合って解決しようとする姿勢が生まれていた。そして最終日のグループプレゼンテーションでは、それまでの彼らの活動の総結集として、各グループとも素晴らしいチームワークや成果を見せてくれた。今回の実践報告では、合宿プログラムの概要、経緯、目的、活動内容に加え、参加教員と参加学生からのコメントを紹介し、この行事を振り返っていく。

2. プログラム実施の経緯

石川県立大学では、2年次の必修英語の授業の中で、アメリカ合衆国インディアナ州にあるローズハルマン工科大学の学生とのオンライン上でのメッセージ交換を、2007年度から毎年実施している。これは、ローズハルマン工科大学のスコット・クラーク氏の提案により始まったもので、日本文化を学ぶアメリカ人学生と英語を学ぶ日本人学生が、お互いに直接やりとりを通じて学ぶ機会を Moodle のフォーラム上で持っているものである。この活動により、学生たちは同年代のパートナーと、一対一で掲示板を使って実際のコミュニケーション活動を行い、中学・高校から学んできた英語を使ってコミュニケーションを行った。その結果、実際にコミュニケーションの目的で英語を使うのは、全く初めてだという日本人学生たちが多かった。その後のアンケート結果によれば、彼らの多くが「初めて自分の英語が本当に通じることを知った」と感じ、大きな感動と達成感を経験した。

その活動を始めて2年後、ローズハルマン工科大学で「学生たちに現地で国際的な体験をさせたい」という意向で9名の学生を石川県立大学へ送るプログラム

が企画され、2010年後期に2泊3日の日米の学生文化交流活動が行われた。この合宿を企画する際、クラーク氏から「合宿の間、3日間楽しく過ごすだけでは学びとしては不十分なので、合宿をする前に日米の学生と一緒に何かを作り上げ、共に学んだという達成感を持てるタスクを考えよう」と提案があり、石川県立大学の広報ビデオの英語字幕を作るというタスクが選ばれ、日米各9名の学生たちをこれに取り組みせ、合宿の際にこの発表会を組み込んだ。

さらに2年後、2012年後期には二回目の日米学生合宿が企画された。この時のローズハルマン工科大学は20名、引率教員も2名、受ける側の石川県立大学の参加学生も25名、引率教員は4名という大きなプロジェクトとなった。この共同プロジェクトは日米 Map Project と名付けられ、石川県立大学がある野々市市の本町地区と白山市鶴来地区の2か所のまち歩きマップ英語版を作るタスクを中心に企画された。また、合宿中の活動も作成するマップや地域に関連したものを多く取り入れた。たとえば、マッププロジェクト発表会のリハーサルは、全員が二ヶ国語で行われるプレゼンテーションに何らかの形で参加できるように、各学生の役割を細かく分担し、一人ひとりにとってプロジェクトを通して得られる学びや達成感を確保できるようにした。

今回の合宿は、それから2年後の2014年の春に行われたものである。先に述べたように、今まで本学のやりとりをリードして下さったスコット・クラーク氏が退職する前に、もう一度国際交流プログラムを持ちたいというローズハルマン工科大学の呼びかけを受け、本学の学生たちにもできるだけ充実した体験にしたいという意図のもと、企画・運営されている。

3. 合宿の目的と概要

合宿の目的は、日米の同世代の大学生たちが共同学習・交流することにより、それぞれがお互いの言語、社会、文化など、多くのことを学び合うことである。特に今回のプログラムでは、学生たちが主体的に動い

て自分の意志でコミュニケーションを取り、またチームとして問題解決することを主眼とし、レクチャーを聞いているだけというような受け身の活動をできるだけ少なくした。

このような要素を考慮し、今回のプログラムで新たに企画をしたことは3点ある。まず、ローズハルマン工科大学生を対象とする県立大生による日本紹介ミニワークショップを企画し、本学の学生にその形態・方法を考えさせた。つまり、アメリカ人学生に対し日本の何をどのように説明し、体験してもらうかということを考えさせたのだが、これが本学の学生にとって、今回の合宿に能動的に取り組む大きなモチベーションを生むことにつながった。次に、キャンパスツアーとして本学の研究室を訪ねるイベント（Campus Tour—Visiting Scientists at IPU）を企画し、ローズハルマン工科大学生には日本の研究者と話す機会に、また本学の学生たちには、そのアメリカ人学生をガイド・エスコートし説明の補助をする機会とした。これにより、このキャンパスツアーが両学生にとって知的好奇心を刺激する、興味深いイベントとなったと思う。最後に、小グループで観光をした翌日に、プレゼンを通じて他のグループに自分たちが学んだこと、体験したことを伝えるという機会をもうけたことである。これはスケジュール的には非常にきつかったが、実際に行ってみると想像を超える成果があった。学生たちは観光計画、互いの相談の段階から報告することを意識して動いており、当日の観光・文化体験を共有し、研修センターに戻ってから話し合っってプレゼンの内容を決め、翌日発表するところまで、お互いに協力してチームで動いており、この一連の活動によって緻密なコミュニケーションが必要となり、その結果彼らの能力が十二分に引き出されたと感じている。合宿の3日間の大枠のスケジュールは以下のとおりである。

3月2日（日）（県立大学）

本学学長あいさつ、ローズハルマン工科大学人文学部長挨拶、大学紹介、本学からの

記念Tシャツプレゼントと説明、アイスブレーキング活動、本学の研究室を訪ねるキャンパスツアー、池田美由紀和太鼓ワークショップ（ここまで県立大）、県立大生が企画するミニワークショップ（けん玉、折り紙、書道、ふくわらい）（以上研修センター）

3月3日（月）（金沢市内）

午前：全員で英語で金沢観光（兼六園、時雨亭で抹茶体験、金沢城公園）

午後：小グループでそれぞれ企画した金沢観光（ひがし茶屋街、金箔体験、近江町、忍者寺、尾山神社、カラオケ、プリクラなど）

3月4日（火）（研修センター～金沢駅）

グループ別観光報告プレゼン（英語・日本語、パワーポイント）、金沢市内見学、金沢駅で見送り

アメリカがやって来る！



Ishikawa Prefectural University

IPU × RHIT

Rose-Hulman Institute of Technology

合宿プログラム

アメリカのローズハルマン工科大学（RHIT）の学生14名が石川にやってきました！彼らとの2泊3日の合宿に参加しませんか？国際交流に興味のある方、大募集！

（写真は2011年度に行った合宿の様子です。）

対象：学部1～3年生の希望者

合宿日程：3月2日（日）～4日（火）（2泊3日）

内容：小グループでのディスカッションやプレゼン、和太鼓体験、金沢観光など

活動場所：石川県立大学、金沢市内

費用：自己負担は数千円（大学から助成が出るので）

※研修センター 宿泊は石川県青少年総合研修センター（金沢市）

国際交流のチャンス満載！

①研修センター 和太鼓体験
②和太鼓体験
③和太鼓体験
④和太鼓体験
⑤和太鼓体験
⑥和太鼓体験

興味がある人は説明会へGO！

IPU × RHIT 合宿プログラム説明会

日時：1月24日（金）12:15～12:55

場所：K117（お弁当を食べながらの参加OK）

※本説明会で参加応募用紙を配付します。プログラムに参加を希望する場合は、説明会に必ず出席してください。

4. 合宿の準備を始める前に：学内説明会・応募受付・参加者の選考・その後の連絡

2014年の冬休み明けに、この合宿の応募者募集のポスターを学内に貼り、さらに1・2年生の必修英語の授業でその趣旨を説明し、希望者に1月24日（金）の説明会に来るように誘った。説明会には、パワーポイントで概要を説明した後、2年前の日米Map Projectに参加してくれた学生4名に感想や応募者へのメッセージを述べてもらった。

この説明会がよかったのか、39名の応募があり、その週にメールで連絡して全員に新村と山岸の2名で10分間の面接（全体で4-5時間を要した）をした。この面接を通し、合宿に対して学びたいこと、伝えたいことがはっきりしている、意欲が高い学生を18名（3学科の1~3年生、院生）選考しメールで選考結果を伝えた。この面接の中では、合宿にあたって準備段階から、学科や学年を越えて一人で考えて行動できるメンバーを求めていることをはっきりと伝えたので、その後の活動が比較的スムーズに行ったと考える。

その後、準備ミーティングを全員で後期試験前に3回行い、スケジュールの説明、観光グループ分けとリーダー決め、ワークショップのメンバーとリーダー決め、大学紹介・アイスブレイキング・Tシャツデザインなどの担当学生を決定し、大体の流れを整えた。ここから試験期間に入るため、直前ミーティングまでは、教員から学生たち全員への連絡はメールが中心で、あとは学生たち同士の各グループでミーティングを持つように指示した。ワークショップ等で必要なものは、教員がまとめて注文を受け発注し、納品されたら学生に知らせるというようにした。記念Tシャツについても担当学生と教員、業者で連絡を取り、合宿の日までに間に合うように注文、集金を行った。学生との連絡には、メール以外にも学内の学習管理システムMoodleも使い、スケジュール表、グループ表、Tシャツのデザイン、観光プラン、学生の写真などを載せて、直前ミーティングで全員集まるまで情報を共有できるようにした。



5. 学生たちの活動内容

(0) 前日の直前ミーティング（3月1日（土））

この日は、県立大に本学参加学生全員が集まり、一日準備ミーティングや設営を行った。ワークショップ活動のやり方を確認し、お互いに教える側・習う側の両方になってリハーサルを行い、英語を使って大学紹介およびアイスブレイキング活動のリハーサルも実施した。また、観光グループのルートの確認、名札・パンフレット・飲み物やお菓子の用意・教室の設営など、教員が見守る中、学生たちが協力しあって、朝10時頃から午後4時頃まで準備をした。発表やアイスブレイキング活動を担当する学生たちは、解散時間が終わっても何度も教員に質問・確認し、練習を繰り返していた。「これで伝わりますか？」と熱心にリハーサルをする彼らに、この時点ですでに合宿の教育的意義を強く感じた。

(1) オープニング（学長挨拶、大学紹介、Tシャツの紹介、アイスブレイキング活動）（3月2日（日）午前）

ローズハルマン工科大学一行が大学に到着し、K126教室に全員が揃った。熊谷学長が英語で挨拶をして下さり、それに対しローズハルマン工科大学のテレンス・ケーシー人文学部長がお礼の言葉を述べられた。その後、両大学の学生たちが英語で自分たちの大学の紹介をした。県立大学側はグループで、ローズハルマ



工科大学側は一人の男子学生がそれぞれパワーポイントを使ってプレゼンを行った。どちらものびやかな若い感覚で、大学の教育研究のことだけでなく、サークル活動や学生活動のことなどを含んだとても楽しい発表だったので、聞いている側も緊張がだんだんほぐれていく感じであった。それから、本学の学生メンバーがデザインした日米学生合宿 2014 記念 T シャツをプレゼントした。また、その学生からデザインの意味についてのプレゼンも行われた。(本学の学生も自費で同じ T シャツを購入しており、午後の和太鼓ワークショップでは全員がそれを来て、太鼓演奏を楽しんだ。)

その後、本学の学生がアイスブレイキング活動を行った。自分たちで企画し、リハーサルを行っているので、非常にスムーズに進行した。周りの人たちに誕生日を聞き合いながら座席を移動するゲーム、フルーツバスケットのフルーツの代わりに日本食（梅干し、おにぎり等）を使った日本食バスケットなど、若者のエネルギーと笑いが教室に溢れて、両大学の学生たちの緊張が一気に緩んだ時間であった。

(2) 昼食とキャンパスツアー (Campus Tour – Visiting Scientists at IPU) (3月2日(日) 午後12時半～3時)

その後、和風のお弁当を囲んでグループに分かれて会食をした。お弁当についての説明も本学の学生が各テーブルで担当した。その後、7つのグループが本学の研究室を訪問し、担当教員や学生から説明を受けた。このキャンパスツアーにあたって、生産科学科の古賀

先生と博士後期課程在学中の宮下さん、環境科学科の高瀬先生と北村先生、資源研の中谷内先生が研究室を公開してくださったので、人数が偏らないようにローテーションを組んで、各グループが三つの研究室を訪問できるような形にした。

この研究室訪問を組んだのが実際の合宿の数日前だったため、先生方からは「もう少し準備の時間があつたら、より興味深い説明ができたと思う」というご意見があった。企画者側の準備が直前になってしまったためなので、申し訳なかったと感じている。

しかし、ローズハルマンの学生たちや先生方からは「研究についての話を聞け、いろいろなものを見られたことは非常に興味深かった」と大好評で、ただ施設や教室を見せるだけではなく、キャンパスツアーを通じて人的交流をすることの意味を再確認した。さらに、後で先生方に話を聞いてわかったことだが、本学側にも教育的メリットがあったようである。

例えば、古賀先生の研究室では、微生物（植物病原菌、植物共生菌そして線虫）と植物との相互作用の研究を行うので、走査電子顕微鏡と透過電子顕微鏡は不可欠な機器であることを説明して、最初に植物体内の線虫の養分吸収行動を光学顕微鏡下でビデオ撮影した



ものを見てもらい、その後、線虫の感染部位を電子顕微鏡で観察してもらったそうである。

ローズハルマン工科大学側には実際に電子顕微鏡を見たことのある学生はほとんどなく、とても興味を持って熱心に説明を聞いてくれ、線虫の被害はどのようにして起きるのかなどの質問もあった。説明は博士後

期課程の学生の宮下さんがほとんど行ったそうだが、彼女にとって英語でこのような説明するのは初めてで、終わった後「自分の説明が学生たちによく理解してもらえて、とても自信をもてるようになった。この機会は自分にとってとても良かった」と語ってくれたそうだ。このようなイベントを本学の院生の教育にも活かせたということは非常に嬉しいことである。

(3) 池田美由紀和太鼓ワークショップ (3月2日(日) 午後4時～5時半)

国内外で活躍なさった経験がある白山市在住の和太鼓奏者の池田美由紀さんが、仲間である美由紀座メンバー15名と一緒にワークショップを開催して下さった。体育館に20個以上の大小の和太鼓を運んで下さり、メンバーでの演奏、そして参加者に対する太鼓の演奏指導を誠意と熱意を持って実施して下さった。アメリカ人学生はもちろんのこと、和太鼓を見るのも聞くのも初めてという日本人学生も多かったが、「本当に楽しかったです。90分があつという間でした!」と多くの日米の学生が語っていた。また、みんなが集中してワークショップに参加することにより、一種のアイスブレイキング効果もあり、この後の活動がさらにスムーズに行つたと感じた。

池田美由紀さんには、本学の学生たちから短いお礼状を送ったが、その中に以下のようなコメントがあり、ワークショップを通して学生たちにとっても貴重な出会いがあったことが感じられる。



まず、池田美由紀さんの人を動かす力に感銘を受けました。あの統率力の極意を教わりたいと思いました。太鼓演奏よりもワークショップのとても良い例として、素晴らしい体験をさせて頂きました。池田美由紀さんのような方には多くの人がついていくだろうと思います。私自身も、将来そう思われる人になりたいです。職種が何であれ、人として尊敬されるような人になりたいです。そういった意味で、今回は非常にためになる体験をさせていただきました。団体や組織をまとめることや、参加者をより楽しませるその方法、コツ、極意を教えてほしいと思いました。久々にここまで圧倒される大人に出会った気がしています。太鼓自体にあまり興味はないですが、あのようなワークショップを実現するための手段としての太鼓には興味があります。池田美由紀さんにお話を伺ってみたいです。(2年男子)

(4) 県立大生が企画するミニワークショップ (3月2日(日) 午後8時～9時半)

研修センターの大研修室において、本学参加学生が4つのグループに分かれて、日本文化ミニワークショップを行った。ローズハルマンの女子学生は夕食後、着物を着つけてもらい、そのままワークショップに合流した。4つのワークショップが大研修室の四隅でそれぞれコーナーを設け、ローズハルマンの学生も4グループに分かれ、それぞれのワークショップを15分ずつ体験してローテーションする形にした。

まず、折り紙のコーナーでは、手裏剣(学生によれば英語名はNinja Starというということである)の作り方を学生たちがステップごとに指導し、できあがった手裏剣を的に当てるゲームを指導していた。前日のリハーサルでは折り紙の作り方の英語がまだできていないと言っていたが、本番ではうまく行ったようである。



ふくわらいのコーナーでは、本学の学生が作成した巨大なふくわらい（スーパーマリオとピーチ姫）を使って、グループに分かれてゲームを行っていた。前日のリハーサルでは日本語で行っていたが、本番ではローズハルマンの学生に対して、英語でちゃんと指示を出しており、みんなとても楽しんでパーツを顔の絵の上に置いていた。

書道のコーナーでは、事前に本学の学生たちが何種類かの漢字をお手本として書いて用意していた。これらの漢字の意味をアメリカ人学生に説明し、どの漢字を書きたいかを本人たちに選んでもらった。ワークショップ後に各自の作品を新聞紙にはさんで、お土産として渡していた。

けん玉のワークショップメンバーは、ほとんどが初心者であり、かなり前から自分たちの練習が始まっていた。学生たちは基本的な技から自分でまず練習してから、当日はローズハルマンの学生たちに教えており、最終的にはワークショップは非常に盛り上がっていた。学生たちの努力が実ったと言えるだろう。

全体として、各グループとも本当に集中して活動に取り組んでおり、どのワークショップからも満面の笑顔があふれていた。リハーサルが功を奏し、本学学生たちの説明・指導とも非常にスムーズに行われて、それぞれの目的を達成できたと感じられた。

(5) 金沢観光 (3月3日(月) 午前・午後)

研修センターをバスで出て、まず兼六園に向かった。最初クラーク氏から兼六園の簡単な説明を受け、各自、兼六園の入口で英語または日本語のマップをもらい、グループ別に公園の中を歩いた。10時に時雨亭の抹茶体験を予約していたので、そこで全員が合流し、まず控えの間に入り日本庭園や和室の説明をクラーク氏から受けた。お茶室に入ったあと、時雨亭の職員の方から茶会の作法、和菓子、お茶碗、抹茶についての説明を全員で受け、その後和菓子とお抹茶がふるまわれたが、その直前までわいわいと騒いでいたメンバーが一同、本当に静かにお茶をいただいている姿が印象的であった。

その後、金沢城公園へ移動した。石垣やお城についての説明をクラーク氏から受けた後、各グループに分かれて金沢城公園の中を散策した。その後そのまま解散して、各グループの本学学生が企画した金沢観光ツアーに分かれて出発していった。(グループに分かれてからの観光については、尾山神社やひがし茶屋街などですれ違うときに手を振りあったりした以外には、教員グループにはこの時点では知り得なかったが、翌日





の観光報告プレゼンでそれが明らかになり、嬉しい驚きがたくさんあった。)各グループは夜9時ごろにはみんな研修センターに戻ってきた。帰った後、グループ別にコンピュータを囲んで写真を整理し、簡単なパワーポイントファイルにまとめて翌朝のプレゼンの準備をしていた。

(6) グループ別の観光報告 (3月4日(火) 午前)

翌日は、朝8時半から研修センターの研修室1でこの観光報告プレゼンが行われた。各グループとも全員が観光で見たものや体験したものについて英語または日本語でコメントを交互に述べた。彼らのプレゼンは個性的で、ユーモアに富み、聞き手への配慮にあふれていた。聞いている全員が何度も大声で笑わされ、そして同時に日米学生のチームワークとこのプレゼンに感動を覚えた。これらの発表を聞いて、学生たちが前日の夜もミーティングを持って、この内容についてきちんと相談し、プレゼンが盛り上がるようにまとめた



のだということが分かった。

観光報告プレゼンがすべて終わってから、クラーク氏にコメントをいただいた。こちらはプレゼンに対する講評をお願いしたつもりだったが、クラーク氏は、日本語でこのように言われた。「ローズハルマンの学生たちがこんなに充実した素晴らしい経験ができたのは、石川県立大学の先生方と学生の皆さんのおかげです。本当に、本当にありがとうございました。心から感謝します。」これを聞いた石川県立大学教員と学生一同は胸がいっぱいになった。

(7) お見送りと振り返り (3月4日(火) 午後)

観光報告プレゼンが終わり、荷物を載せて全員バスに乗った。それから金沢駅に移動し、そこで最後の1時間半をともに過ごした。最後に回転寿しに行ったグループもあるし、お土産を買いに行ったグループもあった。しらさぎが出発するプラットフォームまで全員で見送りに出たが、学生たちがいつまでも名残惜しそうに話をしたり、写真を撮り合ったりしているのを見ると、彼らが本当に充実した三日間を過ごしたことが伝わってきた。

無事に彼らを見送ってから、県立大生はバスに戻った。乗ってからも学生たちは、「え〜、バスの中、こんなに空席が多くて、本当にさみしい!」「もう行っちゃったなんて、信じられない」と何度も言っていた。本学に戻り、K129 教室で合宿の振り返りを行った。引率教員からコメントを述べ、各自がポートフォリオ用紙に合宿の振り返り・感想を記録した。報告に載せる



ことを了承してくれた学生の感想については、本報告の後半に紹介してある。

6. 参加教員の感想・コメント

今回は、ローズハルマン工科大から4名の引率教員がいらっしゃるということもあり、学内でも参加を依頼した結果、本学から英語教員を含む4名の先生が合宿に参加した。以下に参加した先生方からの感想・コメントを紹介する。

IPU×RHIT Gasshuku Program に参加して

教養教育センター 山岸 倫子

今回の合宿の話が持ち上がった時(2013年12月)、本学学生にとって素晴らしい機会であると嬉しく思うと同時に、実は密かに心配もしていた。私がローズハルマン工科大学との合宿に参加するのは今回が二回目だったのだが、前回(2011年度)は、日米の学生がオンラインでの英語マップ作りを通して交流を育んだ後



で合宿を行った。そのため、合宿で顔を合わせる頃には、日米の学生の間には一体感が生まれていた。けれども、今回はそのような事前活動をする時間を持つことは難しく、日米の学生は合宿の2泊3日のみ交流することになった。そのため、前回のようない体感が果たして生まれるのだろうかと不安に思っていたのである。

けれども合宿が始まってみると、そのような心配は

全く無用であったことが分かった。合宿のあらゆる場面において、日米の学生がこの合宿を心待ちにしていたこと、そして、心を全開にして思い切り楽しもうとしていることがヒシヒシと伝わってきたのである。一生懸命英語でコミュニケーションを取りながら、真っ直ぐに笑ったり泣いたりする学生達を見ていると、こちらまで胸がいっぱいになり、何度も涙ぐみそうになるほどであった。

授業では見たことのないような、学生達の生き生きとした表情を眺めながら「私が授業でこの表情を引き出せないのは、教員としての力が不足しているからだな…」と反省しつつ(同じことをローズハルマンの引率の先生も仰っていたのが可笑しかった)、学生達の素晴らしい一面を見ることができて、とても幸せな2泊3日であった。

直前になっての募集だったにもかかわらず、本プログラムに応募してきた学生は多く、企画側としては嬉しいことであった。しかし、ローズハルマン側の参加学生数とのバランスを考えた結果、半数ほどの学生を面接で落とさざるを得ず、非常に残念でもあった。自身の留学経験からも思うことであるが、若い時にする国際的な体験は、私達の考え方や人生に対する態度に大きな影響を与える。今回参加した学生達も、きっとそのことを実感してくれたのではないか。引率教員や予算の確保など大変なことも多いが、もしこのような国際交流プログラムを継続できたら、今回は残念ながら参加できなかった学生達や、これから県立大学に入学する学生達にとってどんなに良いだろう、と思う。本プログラムの今後の展開を大いに期待している。

日米学生合宿に参加して

環境科学科 高瀬 恵次

3/1(土)から3/4(火)のローズハルマン大との合宿研修は、驚きの連続でした。まずは、およそ1ヶ月程度の短い準備期間で、実のある研修内容を計画された担当の先生方およびこの合宿に参加された学生の皆さんに敬意を表したいと思います。先生方のご努力も

することながら、日曜日午前中のアイスブレイキング、午後の研究室訪問（キャンパスツアー）、夜のワークショップ、そして月曜日の金沢観光と、それらを企画し、その主役を演じた学生さんたちの力には驚かされました。どのメニューも古い時代に育った私には思いも寄らぬ、ユニークで洗練された内容でした。最終日のプレゼンテーションでは、両大学学生の交流の深さに感動を覚えました。

短い期間で、しかも、お互いにたどたどしい日本語と英語での交流でしたが、充実したものになったと思います。おかげさまで、私自身もローズハルマン大の先生方との新たな関係を築くことができました。これからも、このような企画と実践を通して、本学の学生諸君が、異文化に関心を持つだけでなく、多くの人と協力し交流し、自ら、そして周りの人たちを仲間にして一歩前へ踏み出す力を養ってくれることを願っています。関係の教員および学生の皆様、本当にお疲れ様でした。



日米学生合宿に参加して

環境科学科 長野 峻介

今回の Rose-Hulman Institute of Technology との交流プログラムは、本学の学生たちにとってコミュニケーション能力を養う非常によい機会となった。なかなか思い通りに使えない英語を通してのコミュニケーションであるため、相手の言葉に集中して耳を傾け、自分の考えを整理、確認しながら言葉や身振り手振り

で表現して会話する。そうした過程を通して能動的に意思疎通を図ることの重要性を改めて認識できたようである。そして、国際的な共通語としての英語の便利さ、重要性を体感することができ、英語の学習意欲の向上にもつながった。学生たちによるアイスブレイキング活動、ミニワークショップ、観光ガイドでは、学生たちの様々な工夫が随所に見られた。どうすれば、日本文化の紹介に絡めながら自然に打ち解けあい、お互いに楽しみながら活動できるのか、入念に検討した企画、運営を行っていた。

また、普段は英語のみの会話や情報に囲まれている RHIT の学生たちも、非英語圏の社会文化を肌で感じた本学の学生との交流は、とても貴重な体験であったと思われる。キャンパスツアーでは、RHIT での研究とは異なる本学の研究紹介を受け、とても関心を持って解説に聞き入り積極的に質問をしていた。

今回、本学から男子学生の参加者が少なかったが、こういったプログラムで得られるメリットを周知し、今後は意欲を持った男子学生の多くの参加を期待したい。また、Facebook を活用し事前に情報交換を行い、写真の共有などを図った。交流プログラムで深めた友情により、今後も SNS などを通じて学生同士の交流は続いていくものと思われる。

7. 参加学生の感想・コメント

参加学生たちは全員、ローズハルマンの学生を見送った直後に本学に戻ってポートフォリオ用記録を書いた。読んでみると、みんなの感動や興奮がそのまま伝わってくるような文章である。名前入りで紹介することを了承してくれた学生について以下に紹介したい。アメリカ人学生についてはイニシャルで示している。

生産科学科 1年 渋谷 麻由

たった2泊3日、彼らと一緒に過ごただけなのに、日本人と話すときも「Yes!!」や他の英語の文章を話してしまっ、自分でも無意識に英語を使っ、影

響はとても大きいなと思いました。プレゼンテーションをする時、私たち日本人は紙を見ながらしていたけれど、アメリカの学生は何も見ず、身振り手振りでプレゼンをしていて、アメリカの学生の方が優れている、私ももっと頑張ろうと思いました。

出会ったときは、聞き取ることも、自分の言いたいことを言うことも難しかったけれど、時間が経つにつれ、だんだんと聞き取れるようになり、しゃべるようになりました。それが自分の中でとても驚きでした。日本での日常会話でカタカナ英語を使うけれど、トイレは restroom など、伝わりそうで伝わらず、新たに知ることが多かったです。

今後は、短期留学か海外旅行がしたいです。出会いを大切に、今回仲良くなれたアメリカの友達とずっと連絡を取って、また会いたいです。

環境科学科1年 中川涼花

本当に楽しい3日間だった。RHITの人たちは、みんないい人ばかりで、たくさん話せてとても良かった。1日目に比べて、英語が少し通じるようになったし、



言いたいこと、教えたいことを少しでも伝えることができたと思う。日本食（おすしやラーメン、お好み焼き、お菓子、etc.）がおいしい！と言ってくれてとても嬉しかった。Dがたくさん日本語を覚えてくれて、とても驚いた。お菓子とポケモンと恋バナは、学年だけでなく、国境をも越えることが分かった。国は違っても、恋愛に関する思いは変わらず、とてもおもしろ

かった。RHITの学生だけでなく、IPUの先輩方にも感謝したい。この合宿がないと交流のない先輩ばかりだったので、とてもよいきっかけだった。この合宿に参加できて、本当によかった。

今後は、英語力を伸ばしたい。とっさの時に英語が出てくるようになりたい。そして、自分の国のことを発信できるようになりたい。外国文化にも興味を持ちたいと思う。

食品科学科1年 浮洲 あゆみ

最初はグループ行動のときに日本人は日本人、アメリカ人はアメリカ人で話していて、時々私たちが話しかけるような形だったけれど、3日間で5人（グループ全員）で話せるようになったのでよかった。自分から色々話しかけよう意識したことで良くなっていったと思う。日本の他の学生からもそういう姿勢を学んだ。他のグループの女の子と話していて、好きなアーティストが同じだったり、スポーツをしていたり、食べるのが好きだったり、とても盛り上がったのにはすごくわくわくした。そのときは、ハイテンションでスラスラ英語が出てきて驚いた。アメリカの学生は優しく、つたない英語でも頑張ってくみとってくれて、言いたいことを簡単な英語に直してくれてありがたかった。あと夜に恋バナで盛り上がり、どこでも同じなんだと嬉しくなった。RHITの学生も喜んでくれたみたいで、この活動に参加して本当に良かったと思う。

言葉の壁を感じて、もっと英語をペラペラしゃべれるようになりたいと感じたのと同時に、伝わらなくても伝えようとする姿勢、伝えようとしてくれる相手に対して真剣にどうにか理解しようとする姿勢を大切にしていきたいと思った。とにかく、積極的にためらわずにチャレンジしていきたい。

食品科学科1年 杉原 美乃里

3日間を通して英会話のレベルが格段に上がったというわけではなかったが、それでも会話ができるんだと嬉しかった。3日間、いろいろな話をしたけれど、1

日目の夜に同じ部屋の人たちで英語を交えながらガールズトークをしたのが特に楽しかった。また、アメリカの学生も昼近くまで寝ていることもあるという話も聞いて、言葉が違って意外と日本の大学生と同じ所があるんだなあと思った。

また今回、アメリカのことだけでなく、金沢について知ることができたのも、良かったと思う。私は金沢出身だけれど、ひがし茶屋街にも行ったことがなかったし、金箔体験もしたことがなかった。金沢は田舎だし、早く県外に出たいなあとはばかり思っていたけれど、この合宿の準備のために金沢について調べたり、いろいろなところに行ったりして、少し地元が好きになれたし、地元の良さを知ることができた。参加できて本当によかったと思う。楽しかっただけでなく、これから大学生活の間にやりたいことも少し見つけられた。アメリカの学生はもちろん、県立大の学生とも仲良くなれてよかった。忘れられない最高の3日間になった。

これから、英語をもっと学びたい。また、金沢だけでなく、他の地域、県、外国にも行ってみたい。そして、日本のことをもっと知りたい。

生産科学科2年 會澤 亜希子

以前より興味を持っていた国際交流のイベントに参加でき、とても嬉しかった。まず、準備の段階でTシャツのデザインをさせていただき、業者MAGICさんへの依頼、注文、納品全ての段階も新村先生とご一緒させていただき、とても勉強になった。Tシャツはおみやげとしてローズの皆さんにお渡ししたが、喜んで頂けて、本当によかった。

また、今回グループメンバーとたくさんの体験をしたが、はじめはやはりどう英語にしたらよいか分からず、どもってしまい、少し2人を困らせてしまった。少しずつだが、他のローズの学生ともコミュニケーションできるようになり、聞き取りやすいと感じられるようになった。そして、少しはスラスラと言いたいことが英語で出てくるようになった。でもやはり、知識も経験も浅すぎて、伝えるのはとても難しかった。英

語しか使えない環境に身をおくことによって、日本語の良さと難しさを知ることができた上に、英語を学ぶことへの意欲がわいた。そして、もっと日本について説明できるようになりたいと思った。

生産科学科2年 押川 友

自らの英会話力の低さに無気力になった時もあった。しかし、互いに理解し合えた時ほどうれしい瞬間はなかった。自分の質問に楽しそうに一生懸命答えてくれている姿を見ると、どんどん会話を展開したいと思った。しかし、相手の言葉を理解できないことも多くあった。とても悔しかった。もっと知ってもらいたい。もっと伝えたいことがたくさんあった。自分に英語力がもっとあればより楽しんでもらえたと思う。他の日本人学生には、自分よりスムーズに会話をしている人がたくさんいた。合宿の後半は、相手の話し方が変わったのか、自分の意識が変わったのかは分からないが、リスニングが明らかに向上していたことがわかった。今日ほど本気で積極的に英会話にtryしたことは今までにない。今は、頭の中でつねに英語に変換しようとしている自分がある。今まで感じたことがない英語脳だと思う。たった3日間で英語に対する意識が変わり、今自分の見えている世界、知っている世界が変わった。一生涯、忘れることのできないすてきな体験をさせてもらったことに、心から感謝している。

2年後期にローズハルマンの学生とメールを行い、英会話をしてみたいと思っていた。今日の合宿でそれが実現でき、日本で過ごすだけでは知ることができなかった英語力の必要性を、身をもって痛感した。英語ができないよりはできたほうが良いと、軽く考える程



度だったが、英語はできるべきである。話せるべきである。聞き取れるべきであるという考えに変わった。今まで英語は勉強するものだと思っていたが、英語は言葉であり、会話の際のコミュニケーションツールであった。「英語ができる or できない」ではなく、「伝わる or 伝わらない」であった。これからは言葉として英語に取り組もうと思う。能力を上げる必要があると思ったのは、ネイティブ・イングリッシュの聞き取り力と日本語を英語に変換するチカラである。日本人と対話する際に、この日常会話は英語に訳すとどうなるか、考えていきたい。英語しかできない人と話す方が自分の英語力がはるかにあがる気がする。外国人と接する機会をもうけたいと思った。

今回、たった3日間の合宿だったけれど、参加するかしないかで、この先の人生が大きく変わっていたと思うと、参加して良かったと思う。今までの考え方が、まるで変わったため、僕のこれからの生き方も変わってくるだろう。頭で考えることも大事だが、経験を通して、気づき、感じることも怠ってはならないと思うので、とにかくトライしていきたい。

食品科学科2年 高橋 千亜紀

一番印象に残ったことは、自分の言いたいことが相手の外国人に伝わらなかったことです。伝えるということの前に、相手が何を言っているか全く聞き取れず、何回も聞き返してしまいました。相手が言うスピードが速いということもありますが、自分の言語の理解力

の低さも原因だと思いました。一日目は特にそのことを感じ、聞き流すだけで精一杯でした。しかし、2日目に一日一緒にいるときは言葉のキャッチボールができ、また自分も相手に質問を投げかけることができるようになり、話すのがとても楽しかったです。でも、単語をそのまま単語だけで話したりしていたので、相手にとっては意味不明だったと思います。それでも、一生懸命聞いて、笑顔で返事してくれたので、とても安心しました。

もう一つ、笑顔は万国共通であるということ学びました。私のとりえである笑顔だけでもいいから、頑張っけて維持していました。そのおかげか分かりませんが、アイコンタクトを取ってくれて、たくさん話しかけてもらい、とても感謝しています。

生産科学科3年 常川 千春

この合宿では、主に観光グループのメンバーと一緒に活動しました。1日目はお互い緊張もしていたし、私も英語を話すことに慣れていないため、なかなか会話を楽しむことができず、言葉の壁をととても感じました。しかし、2日目の金沢観光で、二人のアメリカ人学生も私たちの英語のスキルに合わせてゆっくりと話してくれたり、私たちが英語で彼らに伝えたいことを、私たちの話す英語から理解しようと頑張ってくれました。もちろん、私たち日本人が英語に少し慣れて頑張っけて伝えようと努力したこともありますが、二人の優しさにとても助けられました。2日目の夜や3日目にはそれまで一方通行だった会話が、一つの質問からさらに広げられるようになりました。ただ、まだ簡単な



表現だけしか使えないし、理解してあげられなかった英語もとても多かったので、本当に申し訳ない気持ちでした。

3日間のこの合宿は、今までで最も外国の方と触れ合う時間が長く、とても貴重な体験をすることができました。私のつたない英語でも伝えようと努力すれば相手は理解してくれるし、楽しく会話もできます。一度挑戦してみることは本当に大切だと感じました。これからもっともっと英語スキルを見につけ、もっともっと英会話を楽しみたいと強く感じました。大学生活では英語を学ぶ機会はありませんが、自分でさらに勉強をしたいです！

食品科学科3年 石過 藍子

常に自分の英語が相手に伝わるか、会話がちゃんと成立するか、いろんな不安があったが、私のまずい英語でも、アメリカの学生はきちんと理解してくれてとても嬉しかった。尾山神社で参拝の仕方を教えた時も、一度しか教えないのに、すぐに覚えて、しかも次の日も覚えていてくれて、日本での体験をととても大切に思ってくれているのだと感じた。

私たちの計画に満足してくれるか、とても不安だったけれど、駅での別れ際に案内してくれてどうもありがとうと言ってくれたので嬉しかった。プレゼントをもらったときは、嬉しくて泣いてしまった。まだまだ話したいことがたくさんあったのに、あっという間に時間が過ぎてしまっていて残念だった。

海外へホームステイをしてみたいと思っていたけれど、英語のスキル不足に悩み、ずっと実現できずにいた。今回の合宿で、ホームステイに行きたいという思いが再燃したので、いつか行ってみたい。また、日常生活にも積極的に英語を取り入れていきたいと思った。

食品科学科3年 奈良 未沙希

この活動で一番身についたのは会話力である。私は英語を上手に話すことが今までできなかった。しかし、三日間外国人の方とお話をしていくうちに、だんだん

相手の言っていることがわかってきて、自分の言いたいことをしっかり伝えることができるようになった。一日目ではまだなれなくて、相手の言っていることが分からなくても、「OK! OK!」と返事をしてしまうときがあったが、最終日には聞こえないことは「もう1回言って」と言ったりして、心から楽しく会話を楽しむことができた。とっさに英語がスラスラでてるようになった。あまり難しい英単語を使おうとはせず、分からない単語はジェスチャーで一生懸命伝えることができた。

またこれに加えて、日本人学生と協力する力も身についた。今回集まったメンバーは知らない人ばかりで、最初は学年も違うのに協力できるのか不安であった。しかし、周りの人も合宿に意欲的な人ばかりであったので、一つの目標に向かって協力して仕事ができた。初対面の人との協力しあう力を身に付けることができたと思う。

食品科学科3年 巻田 春香

はじめはなかなか言いたいことが英語で言えなかったり、なんて言っているのか分からず、うまく会話ができなかった。しかし、一緒に行動していくうちに、ジェスチャーを用いたり、発音をもっとうまくするなどして、何とか言いたいことを伝えることができた。また、日本とアメリカの文化はかなり異なっているので驚いた。(お酒は州によって飲める年齢が違う、食べ物のサイズが違うなど) うまく英語で話せなくても、言いたいことが伝わるということが、一番印象に残った。向こうの学生が楽しそうに観光などをしていたの



で、準備してよかったと思った。

食品科学科3年 山瀬 理恵

1 日目のイントロダクションや日本食バスケットで緊張をほぐし、相手の学生と距離を縮めることができたよかったです。また、和太鼓のプログラムでは、ローズの学生やIPUの学生も初めての人が多く、熱くなりながら一緒にできてさらに文化交流ができてよかった。2 日目の金沢観光では、ローズの二人が気に入ったのは新鮮な海鮮丼やお好み焼きであり、そのお店の雰囲気と味がよかったと言っていた。観光案内中は説明するのが難しかったが、ふたりともぎこちない英語をよく聞いてくれて、うまく伝わっていたのでよかった。夕方から夜にかけては、日本のサブカルチャーであるカラオケやプリクラも楽しんでくれたようで、若者同士の交流ができたと思う。3 日目に列車でお別れするときは、たった3日のプログラムだったにも関わらず、悲しくなってしまう泣きそうだった。終わってみるとあつという間だったが、本当に参加して良かったと思った。

環境科学専攻 大学院1年 菅原 玄太

日米の学生がどちらもお互いが何を言っているかわからない状況で、何とか相手と話をしよう、話を聞こうという姿勢を学んだ。それは、特にアメリカの学生がその姿勢で私に接してくれたからである。また、観光グループの中で将来の夢の話になった。その時に、アメリカの学生から、「Live in the moment」という言葉もらった。今の私に必要な言葉であり、一生大



事にしたいと思う。さらに、「わからない」ことがあったら、正直にわからないと言うことが大切であると感じた。

今回の活動をする前は、何かをするにしても躊躇していた自分がいた。今回の活動で最初にアメリカの学生と話している時、ちゃんと聞き取れないことが怖く、話しかけることに躊躇しそうな自分がいたが、一歩踏み出し、アメリカの学生と多くの時間話することができた。一歩踏み出すことは怖いとも思うが、一歩踏み出した後はとても充実した昨日の自分より成長した自分がいると考えるので、これからは一歩踏み出すことが怖いながらも進んで行きたい。特に、毎日もっと勉強して、研究の良いアイデアが生まれるよう精進していきたい。

8. まとめと今後の展望

今回の合宿では、学生の自主性を大切に活動も多く取り入れたことにより、3日間のすべてが非常に充実した時間となった。アメリカ人メンバーに何とか分かってもらおう、喜んでもらおうと考え、準備の段階から必死で様々なことに取り組んできた彼らは、合宿中もずっと本当に生き生きとした表情で、笑顔が絶えなかった。ローズハルマン工科大学の引率教員の一人、マートランド先生はこう言われた。「私が若い頃チリに留学に行ったとき、こんなプログラムが最初にあったなら、どんなにそれ以降の留学が変わったものになっていたかと思います。留学生にとってはこんな交流が何より貴重です。」何という賛辞であろう。後で聞いた話だが、マートランド先生はこの合宿に参加するまでは、学生の短期の海外研修について「大学の教育プログラムとしての価値があるとは思えない」とおっしゃっていたそうである。しかし、この合宿でさまざまな活動に取り組む日米の学生を見ることにより、その考えが全く変わり、今では「短期の海外研修は、学生たちにとって本当に貴重な体験だ」という考えに変わられたという。学生たちの力が先生の考え方を大き

く変えたのである。

本学の学生たちの様子を遠くから見ている限り、最初から笑顔だったので教員はほとんど問題がなかったと思っていたが、見送りの後に男子学生に話を聞くとこのように言っていたので驚いた。「一日目は話が通じなくて、夜、県立大の男子全員で風呂場の脱衣場で『どうしよう』って三人で、暗くなって、本当に落ち込みました。けれど、その時のことが嘘みたいで、段々お互いに言っていることが分かってきて、最後は全然大丈夫でした！」これを聞いて、遠くから見ただけでは分からなかった彼らの葛藤を知り、それを乗り越えたからこそその彼らの喜びと興奮を改めて感じた。そして、本学の学生同士のチームワークでそれを勝ち取った彼らを心から誇りに思った。

最後に、県立大に戻って書いた彼らの合宿の振り返りとこれからの希望を読んだ。今回のことでたくさんの自信を得た彼らは、多くの学生が「今まで躊躇していたことに勇気をもって踏み出していきたい」、「英語力を上げていろいろな所に出かけて行きたい」、「新しいことに挑戦したい」と述べている。また、本学内で学年や学科を越えて、ともに努力し、苦勞をして得た仲間に対する友情や尊敬、感謝の念を述べている。

普段の授業でなかなか学生の意欲を引き出せないで苦勞していることを考えると、この短い間に起こった彼らの中の変化・成長は驚くべきものがある。国際交流には確かにそのような力があると思う。しかし、現実には形ばかりの国際交流や普通の海外旅行が多く、その場合はこのような成果は望めない。「国際交流をし

ますので学生さんに参加してほしいんです」と言われて学生を連れていっても、ただ外国の学生たちと並んで座ったり歩いているだけだったり、一緒に写真を撮ったりするだけだったりすることもある。何が国際交流かと、学生と教員の心には虚しさしか残らない。国際交流には、目標、そして仕掛けと準備が必要なのである。

学生たちが成長・変化できる国際交流プログラムにするためには、チームで色々なことに挑戦できる大枠を教員側で設定し、それに取り組むやり方を自分たちで決めさせ、実際に一人ひとりにほんの少しチャレンジだけれど達成可能なタスクを与え、リハーサルをさせて、互いに助け合わせるようにする。実際の本番では、学生にすべての仕事を任せ、自分たちで相談して、何でもやらせる。教員の仕事はすべての活動の準備をして、本番を見守ることと、何か問題が起きた時の問題解決である。文化や言葉の違う学生たちが一緒に何かに挑戦し、お互いに助け合い、喜び合い、支えあうような形での国際交流をこれからも本学が続けていけるなら、学生たちにとっては本当に貴重な経験になることだろう。ローズハルマン工科大で様々な国際交流を長年やってこられたクラーク氏がアメリカに帰る前に言われた。「この学生たちは、今回の経験を一生忘れることはないんです。若いときにこういうことを経験すると、本当に一生覚えているんですよ」と。今回の本学の参加学生たちが今後、海外に行くことがあっても、いや、たとえ海外に行かなくても、この合宿の経験が彼らの将来に大きな力となっていくことを信じてやまない。

